

（様式 1）実施報告書

1 応募者情報

（1）応募者団体情報

団体名	神戸市
-----	-----

（2）都道府県・政令指定都市からの指定の有無及び連携（応募者が地域国際化協会及び地域国際化協会に準ずる法人または団体の場合のみ記載）

①都道府県・政令指定都市からの指定の有無

（応募者が地域国際化協会及び地域国際化協会に準ずる法人または団体の場合のみ記載）

○指定の有無 有・無

○指定の内容

②都道府県・政令指定都市との具体的な連携

（応募者が地域国際化協会及び地域国際化協会に準ずる法人または団体の場合のみ記載）

2 事業の概要

（1）全体概要

①事業の名称	神戸市における地域日本語教育体制整備事業
②目的等	
1 目的	
日本語が十分でないために地域社会への参加をためらっている外国人やその家族などの言語的マイノリティーが自分の声を持てるようにすることが本事業の目的である。それらの人々が日本語学習を希望する際、その時々自分のライフスタイルや学習目的に合った日本語学習の機会を選択できるよう多様な日本語学習の場を提供する。そのためには、行政の役割である公的保障としての日本語支援と地域日本語教室の特性を活かした社会参加に向けた日本語支援という役割分担についても合意形成していく。 また、外国人住民だけに日本語学習の苦勞を強いるのではなく、多様な日本語が通じる社会を目指すという意味で、地域日本語教育の存在を知らない地域住民への周知も行っていく。	
2 本事業を通じて構築を目指す体制の全体像	
【現在の状況：図示も可】	
令和元年度より3ヵ年計画で実施した本事業により、神戸市の地域日本語教育としては図1のようなネットワークができた。 本事業の目的である潜在的日本語学習者を日本語学習の場に取り込むためのネットワークは、外国人コミュニー、地域日本語教室、日本語学校、神戸市関連機関、教育機関、企業、ハローワークなどに広がり、それにより初級日本語クラスの学習者数が初年度24人、2年目191人、3年目520人（2022/2/9現在）と、年々増加してきた。3年目からは、日本語学習機会の拡充の一環として、市内で外国人住民が多い3地域（新長田、中央区、東灘区）に拠点を設け、公的保障としての日本語教育を行っている。	

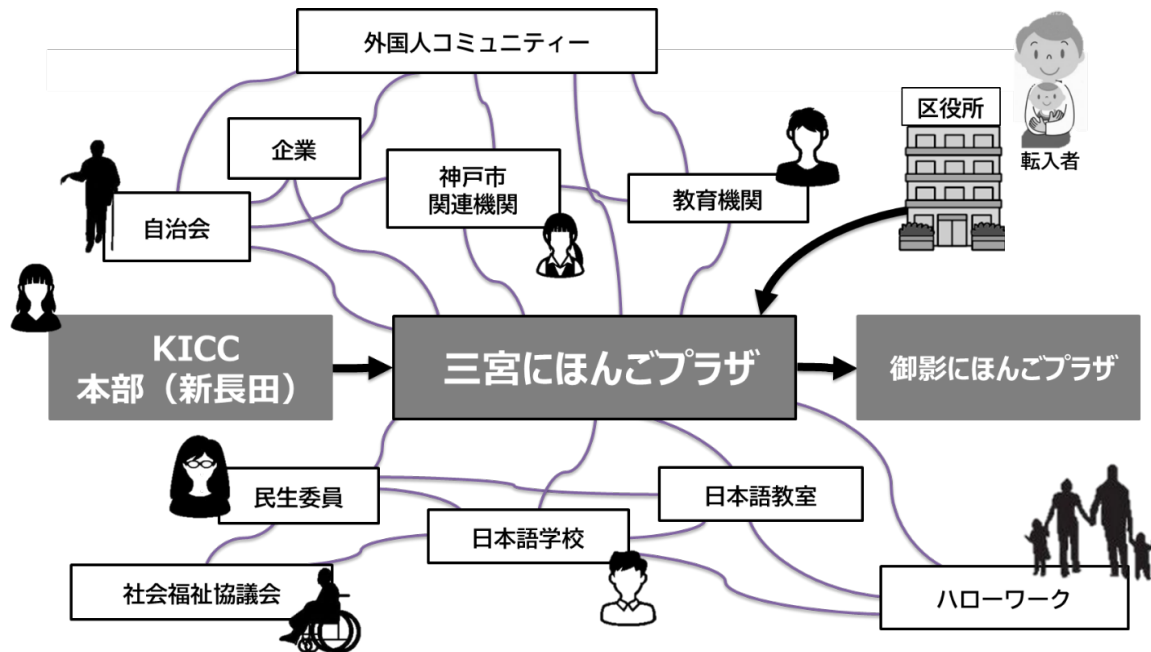


図1：神戸市における地域日本語教育体制

また、神戸市の地域日本語教育体制としては図2のような体制が整った。公的保障としては、有資格の日本語教師が初級クラスを担当し、その後、学習者が社会参加をするための練習の場としての日本語学習は民間の24か所の日本語教室が担当する。また、神戸市はそうした民間の日本語教室の開催を支援する。これまでは神戸市の地域日本語教育においては、このような役割を明確にする機会がなかったため、このような体制ができたことは本事業の3年間の成果の1つであるといえる。

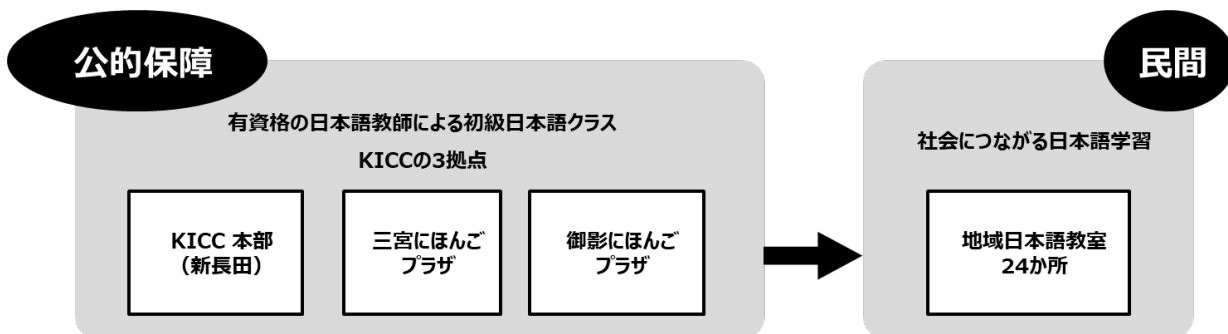


図2：日本語学習における体制（現在）

これまで外国人住民支援機関や、外国人住民が主に帰属する組織を対象に、神戸市の地域日本語教育を支えるネットワークづくりを上図1のとおり進めてきたが、そうした既存のネットワークにはつながっていない外国人住民もまだ多い。そこで、今後、当該ネットワークに新たな要素を加え、その裾野をさらに広げていくとともに、団体間の連携を強化する取り組みを進める。

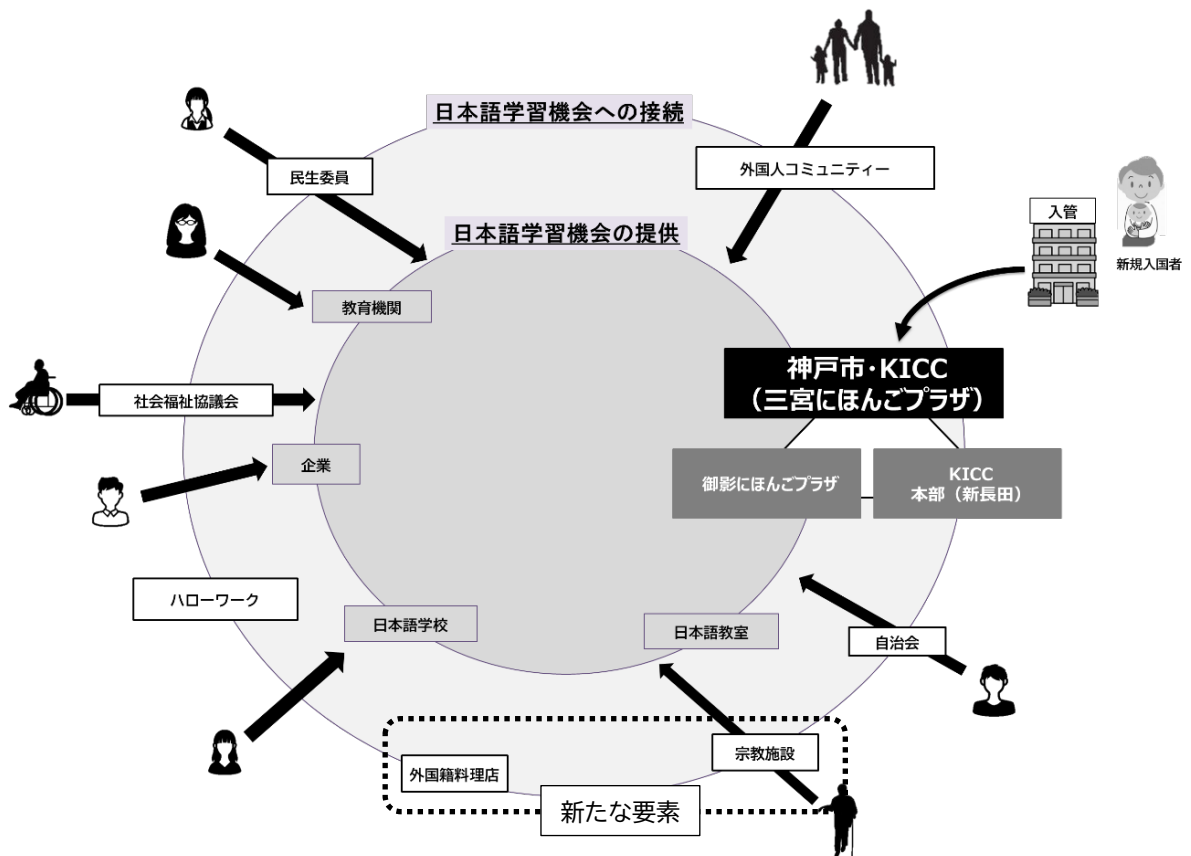


図3:神戸市における地域日本語教育体制(将来)

日本語学習の機会に関しては、学習者の自律的な学習をサポートしていくシステムの強化を進めていく。評価ツールの活用および、過去 3 年間で十分に機能させてこられなかった日本語学習アドバイジングの活用を積極的に行っていくとともに、外国人雇用企業による日本語学習支援の推進を図る。

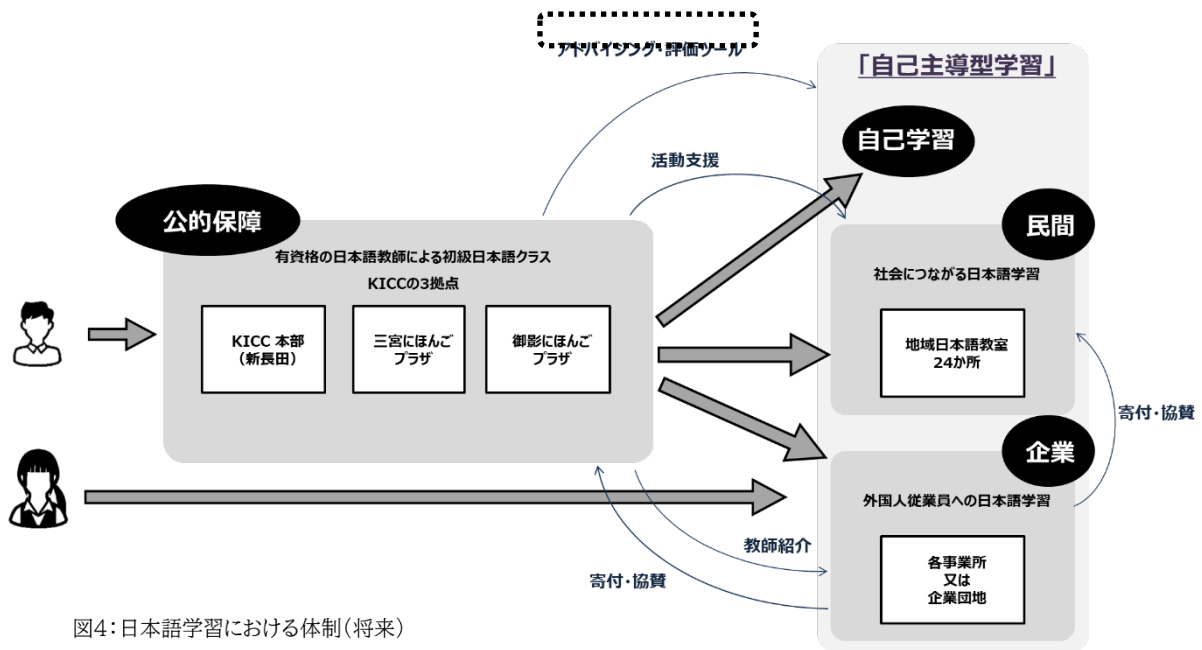


図4:日本語学習における体制(将来)

(2) 令和4年度事業の概要

①事業の期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日（12カ月間）
②前年度までの年次計画における進捗状況（新規応募団体は記載不要）	
1年目は、総括コーディネーター兼地域日本語教育コーディネーターを配置し、まずは上述の潜在的学習者を掘り起こす目的で、これまでは地域日本語教育に関わっていなかった団体や機関などを新たな要素に加えたネットワークの構築に取り組んだ。 次に、学習者のレベルに応じた日本語学習の機会を提供するために、行政が担うべき公的保障としての日本語支援とボランティアによる日本語支援を分けて考え、それぞれの特質を活かした支援を実施するため、行政が担うべき取り組みとして有資格の日本語教師による初級日本語クラスの実施、ボランティアのための相談業務を実施した。 また、これまでは関係性が薄かった市内の日本語教室への訪問を行うことで、教室が抱える問題や行政への要望を知ることができた。1年目は11の日本語教室を訪問した。1月には、まだ訪問をしてない教室も含め13教室の20名が参加する「神戸市内日本語教室連絡会議」の実施に至り、今後の市内の地域日本語教育の底上げにつながった。 今後の課題としては、潜在的学習者を掘り起こすためのネットワークの要素間の連携の強化、有資格の日本語教師の確保、ボランティア育成のための取り組みが残った。また、年度末に夜間中学校から生徒の日本語指導に関する相談があり、次年度の取り組みとして「夜間中学教員のための日本語教育研修」と「夜間中学の生徒のための有資格の日本語教師による夏期日本語教室」を行うこととなった。 そこで2年目は、新型コロナの感染拡大により大幅な変更を余儀なくされたものの上記の課題に取り組んだ。まずは、特に外国人就労者を中心とした潜在的学習者を掘り起こすネットワーク強化のため、市内外国人住民関係機関を集めた「市内日本語学習推進に関する連絡協議会」を開催するとともに、外国人雇用企業を訪問してヒアリング調査を実施した。また、有資格の初級日本語クラスは新型コロナの感染の度合いに合わせてオンラインのみの実施や、対面と両方での実施とし、6月開始クラスから学習者の募集数を大幅に増加するため登録講師の数を増やした。この取り組みにより、これまで留学生への日本語教育しか経験してこなかった教師たちのいわゆる学校型の授業では地域型の学習者への対応が困難であることが、教師たちの授業報告や授業見学をした総括コーディネーターの記録から見えてきた。今後の課題として、地域型の学習者に対する質の高い授業を行える教師の確保と合わせて、現在の登録講師への地域型学習に関するサポートが浮上してきた。さらに、ボランティアの育成については、コロナの影響により、オンライン支援のためのオンライン養成講座を実施したほか、前年度末に計画した夜間中学への2つの取り組み（教員研修、日本語教室）は、新型コロナの感染の拡大の合間を縫って実施することができた。 さらに3年目は、様々な日本語学習者に対応する利便性・柔軟性の高い日本語学習環境・プログラムを提供するため、KICCの拠点再編に伴い、日本語学習支援拠点を3拠点に拡充するとともに、読み書きクラス等のプログラムの充実に取り組んだ。また、継続的な自律学習能力の向上を支援するために必要となる学習評価ツールの作成に着手したほか、本事業で構築を進める地域日本語教育体制の今後の方向性を示し、持続していくため、市内の地域日本語教育に関わる人が共有し、その拠り所とすべき、神戸市における地域日本語教育に関する基本方針の作成に着手した。	
③前年度までの成果と課題（新規応募団体は記載不要）	

これまでの取組を通じて、公的保障としての初級日本語クラスの提供体制の確立や、地域日本語教室や企業といったメインアクターとの関係づくり・支援プログラムの検討を進め、本市における地域日本語教育体制の基盤はある程度整ったと考えている。

特に成果が顕著であるのは、有資格の日本語教師による初級クラスである。1年目 24 人、2年目 191 人、3年目 520 人(2022/2/9 現在)と、学習者数が増加している。これは、ネットワークの強化と、本事業の継続的な実施により、本事業が外国人住民や地域住民に少しずつ知られ始めたと考えられる。

また、地域日本語教室連絡会議の開催により、行政と日本語教室の関係だけでなく、これまではお互いの存在を知らなかった日本語教室同士もつながることができた。それにより、学習者が複数の日本語教室に通ったり、ボランティアが複数の日本語教室で活動したりすることが容易になった。

日本語教育人材の育成に関しては、ボランティアに対しては多様な養成講座や研修会の実施により、日本語を教えるだけでなく、学習者を同じ住民とみることの大切さを声に出すボランティアも増えてきた。また、留学生に対する日本語教育しか経験のない KICC 登録講師たちに、生活者としての学習者に対する日本語教育について、講師ミーティングでの意見交換や、コーディネーターが紹介する参考文献により、少しずつ教師たちの授業の質が高まってきた。

一方で、これまで外国人住民支援機関や帰属組織を対象に、神戸市の地域日本語教育を支えるネットワークづくりを進めてきたが、そうした既存のネットワークにはつながっていない外国人住民もあり、特に身近に支援情報を教えてくれる日本人がいない外国人住民の方はまだ本事業につながっていない場合が多いことが新たに見えてきた。

令和 2 年度から始めている日本語学習アドバイジング業務については市内日本語学習者および支援者への定着が進んでおらず、学習者の自律的な日本語学習をサポートするためのシステムの構築・浸透を図っていく必要がある。

また、事業を進める中で、初級日本語クラス修了後の学習者の地域日本語教室への引き渡しが進んでおらず、スムーズに移行できるための仕組みの検討、および、教室ごとにバラつきが見られる教育水準・方針の向上に向けた取組が新たな課題となっている。

「こうした新たな課題への対応として、年次計画を 2 年延長し、以下 4 項目に新たに取り組むことで、本市における持続可能な地域日本語教育体制の確立を目指す。

- ① 外国人住民が学習機会につながるためのネットワークの充実
- ② 学習アドバイジングや地域日本語教育への評価ツールの普及など、学習者の自律的な学習をサポートしていくシステムの強化
- ③ 地域日本語教室への支援充実（ボランティアへのアドバイジング・立ち上げ支援）
- ④ 企業連携推進や受益者負担導入等による財源確保の検討
- ⑤ 受入側である地域住民に対するやさしい日本語等、多文化共生の啓発事業
- ⑥ 以上を踏まえ、本市における持続可能な地域日本語教育体制の在り方を基本方針として整理」

④令和 4 年度の目標

「日本語が十分でないために地域社会への参加をためらっている外国人やその家族などの言語的マイノリティーが自分の声を持てるようにする」という本事業の目的を念頭に、3 年目までに体制が整った取り組みを継続するとともに、4 年目以降の 2 カ年は、市内外国人住民及び関係機関への本事業の周知浸透、および、継続的な日本語学習支援体制の強化、地域住民への啓発事業の充実を図る。

これに向けて令和 4 年度は、引き続き市内外国人雇用企業との関係づくりを進めるとともに、飲食店や宗教施設といった外国人住民にゆかりのある施設などとの関係づくりにも着手し、外国人住民を日本語学習支

援につなげるためのネットワークの充実に努める。

また、本市における持続可能な地域日本語教育のあり方の検討を進め、基本方針として整理する。

さらに、自己主導型学習のための評価ツールの完成と、コーディネーターがその評価ツールを活用して学習アドバイジングを行う。まずは、初級日本語クラスの学習者のうち、次のレベルに上がれない学習者に対してアドバイジングを行い、学習のサポートをする。また、KICC 登録講師やボランティアたちにも、自己主導型学習の理論を取り入れた研修などを行い、学習者の自律性を高める支援者の増加を目指す。

さらに、初級日本語クラスを終了した学習者を受け入れる体制を整備するために、自分のライフスタイルに合った日本語教室を選択するための多言語版の日本語教室一覧の整備や、KICC の地域日本語教育コーディネーターによる支援者へのアドバイジングを行う。また、日本語教室のコーディネーターやボランティアにも、学習者が自律的に学習できるシステムを支援するための方法を取り入れた養成講座や研修会も実施し、受け入れ側の質を向上する。

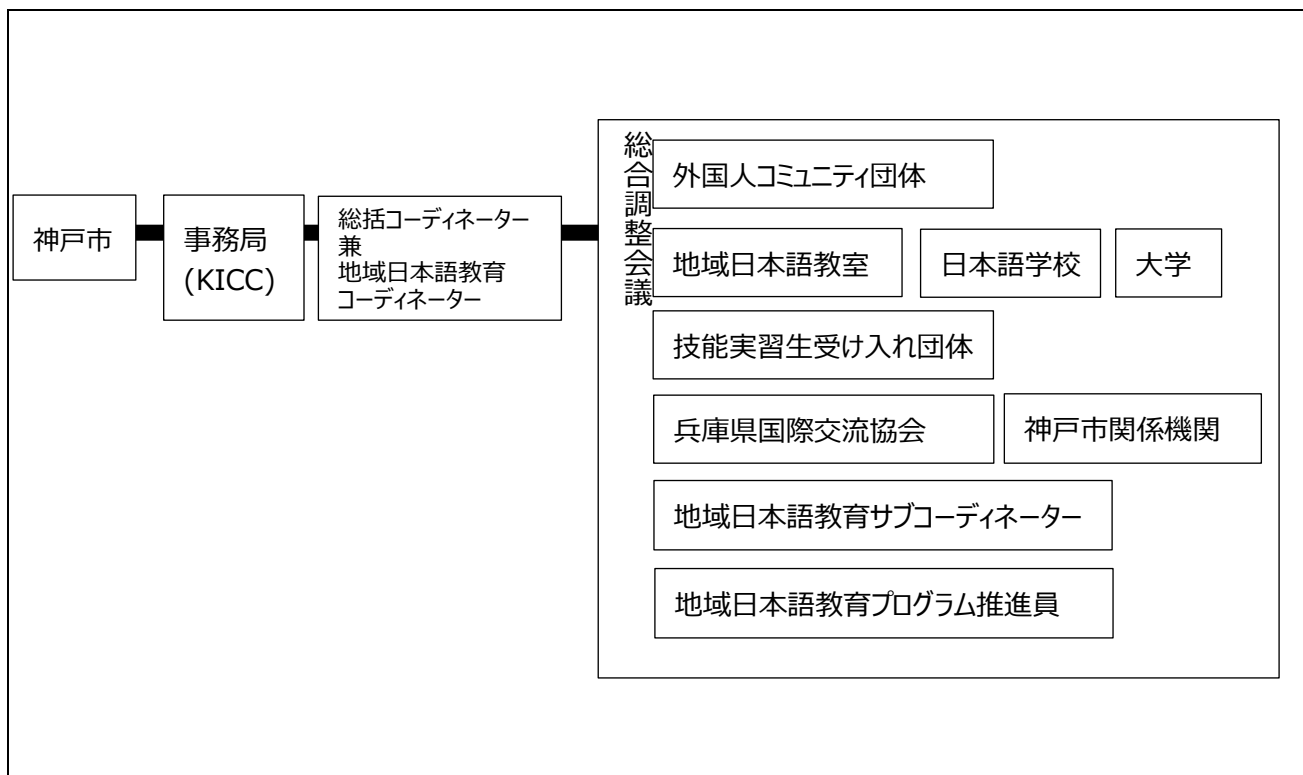
多文化共生社会実現に向けた受入側である地域住民に対する啓発事業としては、地域や企業、学校等外国人も関わりの深い機関を対象に、やさしい日本語を周知浸透させるための取り組みを実施する。

⑤令和4年度の主な取組内容

- ・市内の日本語学習支援に関するネットワークの強化（神戸市単独事業）
- ・基本方針の作成
- ・評価ツールの作成
- ・学習者・支援者へのアドバイジング機能の強化
- ・日本語ボランティアや地域日本語教室コーディネーターのための養成講座や研修
- ・KICC 登録講師のための研修会
- ・やさしい日本語に関する市民フォーラムの開催

3 事業の実施体制

(1) 実施体制（図表等を活用して、総括コーディネーター及び地域日本語教育コーディネーター、調査計画推進コーディネーターを含めて記載してください。）



《事業の中核メンバー》

	氏名	所属	職名	役割
1	尾形 文	神戸松蔭女子学院大学	非常勤講師	総括コーディネーター 地域日本語教育コーディネーター
2	藤本 由季	京進日本語学校神戸校	非常勤講師	地域日本語教育サブコーディネーター
3	神夏磯晴香	早稲田大学	非常勤講師	地域日本語教育プログラム推進員
4	喜多村 直子	神戸国際コミュニティセンター	事業課事業担当課長	

(2) 域内の市区町村、関連団体等との連携・協力体制

- ・神戸市内の地域日本語教育の体制を整えるために、市内の大学、日本語学校、日本語教室とのネットワークを構築する。具体的には、地域の24か所の日本語教室への訪問を継続するとともに、日本語教室連絡会議を開催し、人材やノウハウの交換や共有を行った。また、潜在的日本語学習者を掘り起こすために、区役所や外国人支援組織・団体、児童館、保育所、夜間中学等との連携を構築するとともに、市内日本語学習推進に関する連絡協議会を通じて、市内外国人就労者の関係機関との連携を強化した。

- ・兵庫県内の11の日本語教育関係機関（行政、教育委員会、大学、日本語学校、NPO、任意団体等）で構成されるひょうご日本語ネットの実務者会議に出席し、日本語教育に関する情報交換を図り、体制づくりに活かした。

4 令和4年度の実施内容

（1）実施内容

1. 広域での総合的な体制づくり				
【必須項目】				
（取組①）総合調整会議の設置				
①構成員				
	氏名	所属	職名	役割
1	岡田 浩一	神戸市海外ビジネスセンター	所長	市内の企業への外国人就労に関すること
2	板崎 聡	日本ベトナム友好協会兵庫県連	常任理事	ベトナム人の就労状況の把握
3	安井 裕司	日本経済大学	教授	市内の大学の留学生の状況把握
4	内田 さつき	コミュニケーション学院	校長	市内の日本語学校、及び日本語教育に関する情報
5	高西 宏和	中央区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
6	田中 謙次	長田区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
7	辻 敏彰	教育委員会学校教育課	指導主事	外国人児童及びその保護者の状況
8	松野 孝行	東灘日本語教室	共同代表	日本語教室の状況
9	村上 由紀	兵庫県国際交流協会多文化共生課	日本語教育指導員／総括コーディネーター	地域日本語教育に関する情報
10	篠原 典子	兵庫県国際交流協会多文化共生課	日本語教育指導員／総括コーディネーター	地域日本語教育に関する情報
11	奥 優伽子	”NPO 法人神戸定住外国人支援センター	日本語コーディネーター	日本語教室の状況
12	野上 恵美	ベトナム夢 KOBE	代表	市内ベトナム人の状況
13	林 文勇	（公財）国際ロータリー第2680地区 米山奨学生学友会（兵庫）	副会長	外国人の就労や企業の支援の状況
14	荒井 秀行	阪神金属協同組合	事務局長	市内の企業への外国人就労に関する

				ること
15	永野 喜久	東灘区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
16	梅澤 章	神戸市国際課	課長	行政的見地からの意見
②実施結果				
実施回数	2 回			
実施スケジュール	第 1 回 9 月 28 日（水）15：30～17：00 ハイブリッド 第 2 回 3 月 28 日（水）10：00～12：00 ハイブリッド			
主な検討項目	第 1 回 出席者 22 名 内訳 委員 14 名（対面 5 名、オンライン 9 名） 事務局 6 名（対面 6 名）、オブザーバー 2 名（対面 2 名） ①令和 4 年度の本事業の計画と進捗状況 上記①について活発に意見交換された。さらに各委員それぞれの立場からの外国人支援に関する情報提供や意見交換が行われ、本事業にとって有益な会議だった。 第 2 回 出席者 14 名 内訳 委員 7 名（対面 5 名、オンライン 2 名） 事務局 5 名（対面 5 名）、オブザーバー 2 名（対面 2 名） ①令和 4 年度の本事業の実施報告 ②令和 5 年度の本事業の計画 ③地域日本語教育推進方針（案） 上記①と②については、自律学習のための評価ツールや初級クラスの 1 クラスの定員、企業内日本語クラスについて質問や意見交換ができた。 ③については、日本語教室から非常時の対応について日本語教室での対応が可能であることから、推進方針への提案があった。			
（取組②－1）総括コーディネーターの配置				
・文化庁主催の「地域日本語教育コーディネーター研修」受講者の中から採用したコーディネーターが、昨年度に引き続き総括コーディネーターとしての業務にあたった。				
（取組②－2）地域日本語教育コーディネーターの配置に向けた取組				
地域日本語教育コーディネーターの配置【(○)】				
・総括コーディネーターが兼務した。				
地域日本語教育コーディネーターの候補者育成支援【()】				

(取組②－３) 調査・推進計画策定コーディネーターの配置
【重点項目】
(取組③) 都道府県等の域内における日本語教育の実施に関する連携のための取組
1. 地域日本語教室の訪問 市内の 24 教室の内、今年度は 2 教室を訪問し、教室の活動状況などについて聴いた。過去 3 年間に訪問した教室は、は以下のとおりである。 令和元年度：11 団体 令和 2 年度： 2 団体 令和 3 年度： 4 団体 令和 4 年度： 2 団体 2. 地域日本語教室連絡会議の実施 1 回実施 開催日時：10 月 28 日（金）13：00～15：00 場所：ハイブリッド（三宮にほんごプラザ、ZOOM ミーティング） 参加者数：18 名（10 団体 15 名、事務局 3 名） 内容：①各教室の近況 ②意見交換 以下のような内容が話し合われた。 ・共生のための地域づくりという観点から、ボランティアだけが取り組むのではなく、行政が街づくりの視点で取り組んでほしい。（阪神大震災後の支援から共生のための支援への転換期か） ・企業の責務を考える際、企業内日本語教室を勧めることと、企業が日本語教室に資金的な支援をするという 2 つがある。いずれにしても、企業が従業員への日本語教育に対してもっと責任も持つよう働きかけていくことが肝心。 ・日本語学習だけでは日本で幸せな生活を送ることができない。日本文化を知る機会や外国人が一人では出掛けられないところへ一緒に行くなども日本語教室の役割である。 ・日本語教室の学習者が教室に来る目的はさまざまなのだが、受け入れるボランティアたちが学習者たちとどう向き合うかを考えなくてはいけない。 中国帰国者 1 世は日本語学習より教室に来てみんなで話すことを楽しみにしている。2 世、3 世は、子育て中は日本語学習から離れ、潜在的日本語学習者になっていたが、そのような人たちの中に子育てが終わり日本語を学びなおしたいという人がいる。技能実習生は生活レベルや地位を上げたい。留学生は就職したい。 ・日本語教室の多様な学習者に対応するために現在 KICC で作成中の評価ツールに期待する。 3. 市内日本語教室への補助

KICC 初級クラスを終えた人や初級以上の日本語能力がある人については、地域日本語教室のボランティアによる、社会参加を視野に入れた日本の文化・生活習慣を学ぶ機会を提供している。しかし、これら日本語教室の経済基盤が脆弱である実態を踏まえ、市内の日本語教室を運営する 24 団体のうち、地域日本語教室コーディネーターの配置や、夜間の教室開催などに取り組む団体に対して補助金を交付し、その強化を図った。

補助金交付の基準は以下のとおりである。

『地域日本語教室運営助成金交付要綱』より（令和 4 年 4 月 1 日改訂予定）

以下の 2 つの事業について補助金を交付する。

1. コーディネーター事業

上限を 45 万円とし、日本語教室コーディネーターの謝金・交通費を対象に補助する。

2. 夜間教室事業

上限を 35 万円とし、18 時以降に開催する教室に対し、ボランティアの謝金・交通費・会議室使用料を対象に補助する。

以上の内容で、今年度は 6 団体が申請し 5 団体に交付した。

4. 企業への日本語教師紹介

外国人就労者への日本語学習を希望する企業に対して、KICC 登録講師を紹介し、企業内日本語教室を実施してもらっている。授業を開始するにあたり、総括コーディネーターが企業へ出向き、授業のカリキュラムデザインのための情報を収集し、教材やシラバスを企業に提示する。それをもとに企業との話し合いを行い、授業の内容や期間などを決定する。講師の謝金・交通費・教材費などは企業が負担する。

今年度は新規開拓には至らなかったが、令和 2 年度と令和 3 年度に企業内日本語教室を開始した企業（計 2 社）が、今年度も日本語教室を継続している。

また、本取組の広報と従業員に対する企業側の責務を周知する目的で、今年度は、神戸市海外ビジネスセンターと兵庫県印刷工業組合の 2 団体のイベントで広報をさせていただいた。

（1）神戸市海外ビジネスセンターとの連携（2 回）

① 外国人向け合同企業説明会

開催日：6 月 22 日

場所：神戸サンボーホール+オンライン

② 神戸グローバルワーキング外国人材の活用・定着セミナー

開催日：12 月 9 日

場所：オンライン

（2）兵庫県印刷工業組合

① 理事会

開催日：9 月 15 日

場所：兵庫県印刷会館

② 10 月定例理事会

開催日：10 月 5 日

場所：兵庫県立神戸高等技術専門学院

(取組④) 市区町村への意識啓発のための取組	
・各区のまちづくり課や生活支援課などに初級日本語クラスのチラシを送り初級クラスの広報に協力してもらうことで、職員が外国人住民の日本語学習の重要性を意識することにつながった。 ・各区生活支援課等保護係長会議で初級クラスの宣伝をした。(3月23日(木) 14:45～14:55)	
(取組⑤) 日本語教育人材に対する研修	
1. 日本語ボランティアのための養成講座 (1) 地域日本語教室コーディネーター研修 ✧ 日時：5月12日～6月2日、毎週木曜日、13:30～16:30、1回3時間×4回、全12時間 ✧ 対象：日本語教室でコーディネーターをしている方、または今後する方 ✧ 参加費：2,000円 ✧ 形態：対面 ✧ 受講者数：12名(3回以上出席した12名に修了証を渡した) ✧ 内容 第1回 ・地域日本語教室コーディネーターって何?～役割や能力について考えてみましょう～ ・次回までの宿題：自分の教室の問題点を洗い出す 第2回 ・クリティカルシンキングを使ってみましょう!～課題を決めて問題解決へ～ ・次回までの宿題：問題解決の発表準備 第3回 ・問題解決のプロセスを発表しましょう! ・次回までの宿題：自分の発表を振り返る 第4回 ・アサーティブな人を目指しましょう!～相手も自分も大切にするコミュニケーション～ (2) 日本語ボランティアのためのブラッシュアップ講座 同じ内容で2回実施 ✧ 講座名：「自己主導型学習ってなに?」 ✧ 講師：九州大学留学生センター准教授 脇坂真彩子氏 大阪大学国際教育交流センター特命助教 瀬井陽子氏	

KICC 総括コーディネーター 尾形文

- ◇ 講座内容
 - 1 日目 生涯学習のための自己主導型学習
 - 2 日目 アドバイジングってなに？※1
 - 3 日目 学習リソースを知る
 - 4 日目 日本語学習アドバイジングの言葉
 - 5 日目 日本語学習アドバイジングをやってみよう！※2
- ※1 第2弾は講師の都合で2日目と3日目の内容を入れ替えた。
- ※2 第1弾の実践は日本語学習者へのアドバイジング
第2弾の実践は受講者同士でアドバイジング
- ◇ 対象：日本語ボランティア歴3年以上の方
- ◇ 形態：対面（三宮にほんごプラザ）
- ◇ 参加費：3,000 円
- ◇ 日時：第1弾 9月8日～10月6日、13：30～16：30、1回3時間×5回、全15時間
第2弾 2月15日～3月15日、13：00～16：00、1回3時間×5回、全15時間
- ◇ 受講数：第1弾 15名（4回以上出席した14名に修了証を渡した。）
第2弾 15名（4回以上出席した15名に修了証を渡した。）

（3）出前講座

以下、参加費は無料で講師は総括コーディネーター

① 東灘日本語教室

- ◇ 日時：5月8日、14：40～15：40
- ◇ 場所：御影会館（対面）
- ◇ 受講数：26名
- ◇ 内容：「神戸市の地域日本語教育における地域日本語教室の役割」

② 神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会 2回開催

[第1弾]

- ◇ 日時：6月10日、15：15～17：00
- ◇ 場所：大学共同利用施設ユニティ（対面）
- ◇ 受講数：30名
- ◇ 内容：話すための活動を考えましょう！

[第2弾]

- ◇ 日時：11月11日、15：15～17：00
- ◇ 場所：大学共同利用施設ユニティ（対面）
- ◇ 受講数：18名
- ◇ 内容：アクティブラーニングに挑戦！

③ 知っとう神戸

- ◇ 日時：8月30日、14：00～16：00

- ✧ 場所：神戸市立総合福祉センター
- ✧ 受講数：7 名
- ✧ 内容：アクティブラーニングに挑戦！

2. 大学日本語教員養成課程履修者への地域日本語研修

大阪樟蔭女子大学

- ✧ 日時：7 月 29 日、9：00～11：00
- ✧ 場所：ZOOM ミーティング
- ✧ 受講数：10 名
- ✧ 内容：日本語教育コーディネーターとしての私

3. KICC 登録講師勉強会

5 回開催、すべてオンライン

第 1 回

- ✧ 日時：10 月 2 日、10：00～12：00
- ✧ 参加数：17 名
- ✧ 内容：今後の勉強会で何をするかを話し合った

第 2 回

- ✧ 日時：11 月 6 日、10：00～12：00
- ✧ 参加数：10 名
- ✧ 内容：①桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習』
第 1 章
②授業で困っていることを出し合い、みんなでそれについて考えた。

第 3 回

- ✧ 日時：12 月 11 日、10：00～12：00
- ✧ 参加数：12 名
- ✧ 内容：①桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習』
第 2 章
②日本語教師としての悩み事を出し合った。

第 4 回

- ✧ 日時：1 月 15 日、10：00～12：00
- ✧ 参加数：12 名
- ✧ 内容：①桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習』
第 3 章、4 章
②日本語教師としての悩み事を出し合った。

第 5 回

- ✧ 日時：2 月 5 日、10：00～12：00
- ✧ 参加数：11 名

◇ 内容：①桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)『自律を目指すことばの学習』第5章、6章 4.「地域型メルマガ」の配信 3月1日現在の登録者数117名 今年度3便配信し、これで通算7便になった。 今年度配信内容 第6便(11/9) 「献身」 第7便(12/28)「書籍紹介」岡檀(2013)『生き心地の良い町 この自殺率の低さには理由^{わけ}がある』講談社 臨時便(1/17) 養成講座の案内 5.日本語ボランティアやKICC登録講師などのための相談業務 人数：7名(来館5名、電話2名) 主な内容 ◇ 助成金の申請方法 ◇ 教室での支援内容(使用教材、ボランティア育成など) ◇ 学習者との連絡方法について ◇ 日本語教師になるための方法について			
(取組⑥) 地域日本語教育の実施 実施するものに○ ☐ 都道府県・政令指定都市が主催する地域日本語教育 ☐ 日本語教育実施機関団体等への地域日本語教育			
実施箇所見込数	3ヶ所(東部、中央、西部)とオンライン	受講者数 (実人数)	882人
活動1	【名称】KICC 初級日本語クラス(子どもの同伴可)(既設) 【目標】 - 自分の学習目的を知り、長期・中期・短期の目標を設定し、自分の周りにある学習リソースを活用しながら学習を進め、学習の振り返りができるようになる。 - 次のクールには次のレベルに上がる。 【実施回数】1,861回(1回2時間) @三宮にほんごプラザ(575回) 4月クラス：23回×5クラス＝115回 7月クラス：23回×5クラス＝115回 9月クラス：23回×5クラス＝115回 11月クラス：23回×5クラス＝115回		

2月クラス：23回×5クラス＝115回

@KICC（新長田）（320回）

4月クラス：23回×4クラス＝92回

7月クラス：23回×4クラス＝92回

11月クラス：23回×4クラス＝92回

2月クラス：11回×4クラス＝44回

@御影にほんごプラザ（184回）

4月クラス：23回×2クラス＝46回

7月クラス：23回×3クラス＝69回

11月クラス：23回×3クラス＝69回

@オンライン（Zoom ミーティング）（782回）

4月クラス：23回×7クラス＝161回

7月クラス：23回×8クラス＝184回

9月クラス：23回×6クラス＝138回

11月クラス：23回×6クラス＝138回

2月クラス：23回×7クラス＝161回

【受講者数】805人（3カ所+オンライン）

@三宮にほんごプラザ（304人）

4月クラス：42人

7月クラス：60人

9月クラス：61人

11月クラス：62人

2月クラス：79人

@KICC（新長田）（101人）

4月クラス：16人

7月クラス：27人

11月クラス：34人

2月クラス：24人

@御影にほんごプラザ（45人）

4月クラス：17人

7月クラス：21人

11月クラス：7人

@オンライン（Zoom ミーティング）（355人）

4月クラス：72人

7月クラス：87人

	9月クラス：71人 11月クラス：66人 2月クラス：59人 【実施場所】 ① 三宮にほんごプラザ（神戸市中央区） ② KICC（神戸市長田区） ③ 御影にほんごプラザ（神戸市東灘区） 【受講者募集方法】 KICC のホームページ／SNS、チラシ配布（地域日本語教室、9 区の区役所、神戸市関連機関、児童館、教育機関、ハローワーク、外国人コミュニティの SNS、外国人雇用企業など） 【内容】 開催レベル（対面、オンラインとも） 初級 1：A1 レベル『いろどり入門 A1』 初級 2：A2 前半レベル『いろどり初級 1 A2』 初級 3：A2 後半レベル『いろどり初級 2 A2』 授業の進め方 ・23 回の授業をチームティーチング ・授業後には報告書をメールで一斉送信し、学習者の様子や授業の進捗を他のクラスの講師、コーディネーター、サブコーディネーター、推進員で共有した。 学習の評価方法 ・学習者による自己評価 ・『いろどり』の Can-do を活用した。 【開始した月】 5 月 【講師】KICC 登録講師 39 人（うち、日本語教師 39 人） 【関係機関との連携】なし 「日本語教育の参照枠」や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無：なし
活動 2	【名称】読み書きクラス（既設） 【目標】 ・ 日常生活でどんなものを書くのかを自覚し、その中から自分に必要な文書を選択し、それが書けるようになる。 【実施回数】72 回（1 回 2 時間） @KICC（新長田）36 回 4 月クラス：12 回×1 クラス＝12 回 7 月クラス：12 回×1 クラス＝12 回 11 月クラス：12 回×1 クラス＝12 回

	@御影にほんごプラザ 36 回 4 月クラス : 12 回×1 クラス=12 回 7 月クラス : 12 回×1 クラス=12 回 11 月クラス : 12 回×1 クラス=12 回 【受講者数】 26 人 (2 か所) @KICC (新長田) (15 人) 4 月クラス : 2 人 7 月クラス : 9 人 11 月クラス : 4 人 @御影にほんごプラザ (11 人) 4 月クラス : 1 人 7 月クラス : 6 人 11 月クラス : 4 人 【実施場所】 KICC (神戸市長田区)、御影にほんごプラザ (神戸市東灘区) 【受講者募集方法】 KICC のホームページ／SNS、チラシ配布 (地域日本語教室、9 区の区役所、神戸市関連機関、児童館、教育機関、ハローワーク、外国人コミュニティの SNS、外国人雇用企業など) 【開始した月】 4 月 【関係機関との連携】 なし 日本語教育の参照枠や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無 : なし
活動 3	【名称】 夜間中学での有資格の日本語教師による夏期日本語教室 (既設) 【開催日時】 7 月 25 日～7 月 29 日、8 月 1 日～8 月 3 日、18 : 30～20 : 00 【開催場所】 神戸市立丸山中学校西野分校 (夜間中学校) 【実施時間数】 計 11 時間 【受講者数】 15 人 【開始した月】 7 月 【講師】 3 人 (うち、日本語教師 3 人) 【関係機関との連携】 夜間中学校 【具体的な実施内容】 ◇ レベル別に 3 クラス設定した。 ① A クラス : 初級前半程度 〈目標〉 ・自己紹介 : 名前、住所、仕事、家族について言える。 〈学習者数〉 6 名 ②B クラス初級中盤程度 〈目標〉

	・好きな物や経験について話す。 〈学習者数〉5名 ③ Cクラス：中級前半程度 〈目標〉 ・自分のことばで話し、クラスメートとやり取りをする。 〈学習者数〉4名 日本語教育の参照枠や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無：なし
活動4	【名称】ウクライナ避難民のための初級クラス（子ども同伴可）（新設） 【目標】ウクライナ避難民たちが、1日でも早く神戸に慣れ、翻訳ツールや通訳ツールを使いながらも、一人で行動できるようになることを目指す。 【受講者数】9人 【実施期間】6月20日～12月15日、月～金、10：00～12：00 【実施回数】118回（1回2時間）全236時間 【実施場所】KICC 三宮にほんごプラザ 【内容】 ◇ A1～A2-1 6月20日～11月11日：自主教材『神戸で暮らそう』 ・3名のKICC登録講師が作成した『神戸で暮らそう』を主教材として、授業を行なった。（『神戸で暮らそう』については、本報告書「その他の取組」を参照のこと） ・6月20日開始したが、10月中旬まで五月雨式に新しい学習者が加わったため、当初予定していたようには進まなかった。新規学習者のほとんどが日本語を始めて学ぶ人だったため、クラス全体のレベルも、いつまで経ってもA1から抜け出せなかった。 ・毎回の出席者は3～6名ほどだったが、みんな仲が良く、日本語学習に関しても助け合って学んでいる様だった。 ・過去に来日経験があり日本語レベルが高い学習者は途中で仕事に就いたためクラスを辞めた。 ◇ A2-1 『いろどり A2 初級1』11月15日～12月15日：『いろどり日本の生活 A2 初級1』国際交流基金 ・12月15日でウクライナクラスの終了が決まっていたため、そのときクラスに在籍していた5名に、KICC初級クラスに移るか、ボランティアによる地域日本語教室に行くかを聞いたところ、全員がKICC初級クラスのA2-1レベルに移ることを選択した。初級クラスでは『いろどり』を使っているため、初級クラスに移行する準備として、11月15日からウクライナクラスでも『いろどり A2 初級1』を使うことにした。 【受講者募集方法】 KICCのホームページ／SNS、チラシ配布（地域日本語教室、9区の区役所、神戸市関連機関、児童館、教育機関、ハローワーク、外国人コミュニティのSNS、外国人雇用企業など） 【開始した月】6月 【講師】8人（うち、日本語教師8人） 【関係機関との連携】なし

	日本語教育の参照枠や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無：なし
活動 5	【名称】ウクライナ語で学ぶ KFC 日本語教室（新設） 【目標】ウクライナ避難民への日本語学習支援を通して、ウクライナ避難民が日本で生活する上で必要な日本語を身につけることを目標とする 【受講者数】27 人（教室対面 23 人×1 か所）（オンライン 3 人）（教室とオンライン 1 人） 【実施回数】130 回（1 回 2 時間）全 260 時間 【実施場所】ふたば国際プラザ/自宅（オンライン） 【受講者募集方法】生活支援員からの紹介・ウクライナ避難民どうしの口コミ情報 【内容】神戸市在住のウクライナ避難民を対象としたウクライナ語母語通訳者の支援がある日本語教室の開催 ① 開催日時：週 2 回（水曜と木曜）13:00～16:00（オンライン含む） ② 主な教材：「さぼうと 21」「いろどり」「絵で導入・絵で練習」「こんにちは、にほんご」その他手づくり教材 【開始した月】5 月 【講師】14 人（うち、日本語教師 6 人） 【関係機関との連携】あり 【機関名】 ①（公財）神戸国際コミュニティセンター、（公財）兵庫県国際交流協会、 ② 神戸市外国語大学 【連携内容】①学習時間、対象、内容の相互的な関係や補完関係の相談や報告。 ②ボランティアスタッフの募集。 「日本語教育の参照枠」や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無：あり
（取組⑦～⑭）その他の取組	
取組⑦ 地域における日本語教育の在り方について検討 総合調整会議において神戸市の実情に応じた地域日本語教育の体制について協議した。	
取組⑧ 地域日本語教育の効果を高めるための取り組み （１）日本語学習アドバイジング 【人数】19 人 【実施期間】通年 【目的】 ・取組⑥地域日本語教育の活動 1「会話のための初級日本語クラス」の学習者の中に、次のレベルに移行できない人や、レベルを上げたり下げたりして長期にわたり初級クラスから抜け出せない学習者が 2 割程	

度いる。そのような学習進度が遅い学習者に対して学習に関するアドバイスをすることにより、自分の学習方法や学習計画を意識的に見直す能力を育成する。

【実施回数】19回（1回1時間）

【受講者数】19人

【実施場所】神戸市長田区（KICC）、神戸市中央区（三宮にほんごプラザ）、神戸市東灘区（御影にほんごプラザ）、オンライン

（2）コミュコミュひろば（子ども同伴可）

【目標】KICC 初級クラスで学んだ日本語をもとに、さまざまな日本人とのコミュニケーションを体験する。

【受講者数】115人

【実施回数】21回（1回2時間）全42時間

【実施場所】三宮にほんごプラザ

【受講者募集方法】KICC 初級クラスの学習者へチラシを配布

【内容】コミュコミュひろばに参加するボランティアを募り、その中の3名がファシリテーターとして、企画、運営を行う。3名のファシリテーターは、「教えない」ことを念頭に、学習者が日本人とコミュニケーションできるための活動を企画した。

活動の一部

・オノマトペ（動物の鳴き声）、6マスビンゴ、絵文字、簡単な体操（背伸び）、オノマトペ（音を片仮名にしよう）、オノマトペ（動画絵本を聞いて、見て、考えよう）など

【開始した月】4月

【講師】25人（うち、日本語教師0人）

【関係機関との連携】なし

「日本語教育の参照枠」や、標準的なカリキュラム案等の活用の有無：なし

取組⑨ 地域日本語教育に付随して行われる取組

（1）落語で学ぶ日本語

【日時】6月9日 12:30～14:30

【場所】神戸国際コミュニティセンター

【参加人数】20名

【内容】講師 KICC 登録講師 村山勇氏（芸名：世界屋童話）

・名前作文

・落語に挑戦：2名（インド人1名、ベトナム人1名）

（2）お抹茶と昔の遊び

【日時】3月26日 13:00～16:00

【場所】神戸国際コミュニティセンター

【参加人数】39名

【内容】講師 櫻井久子氏（表千家教授）

- ・本格的なお茶席を設置し、櫻井氏による茶道の説明に続き、お菓子とお抹茶の頂き方や言葉を習い、一人ずつお抹茶とお菓子を頂いた。
- ・隣の部屋には、けん玉、百人一首（坊主めくり）、折り紙を用意し、お茶席の前後に昔の遊びを体験してもらった。

（３）地域日本語教育シンポジウム@神戸

「共生に向けた地域社会の変容

～ ゲスト文化とホスト文化から第３の文化の構築のために ～」

【日時】３月１２日 １３：００～１６：３０

【場所】神戸商工貿易センタービル ２６階第８会議室

【参加人数】１１７人（来場４３人、オンライン７４人）

【内容】講演①山田 泉氏（元法政大学教授）

「地域の日本語学習活動を再考する

—共に学び、共に変わり、共に変えるために—」

講演②齊藤 美穂氏（神戸大学准教授）

「年少者に対する日本語教育と学習支援を考える」

ディスカッション「共生社会にするためには？」

（パネリスト）

山田 泉氏（元法政大学教授）、齊藤 美穂氏（神戸大学准教授）

根津 京子氏（神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会事務局長）

増田 麻美子氏（文化庁国語課日本語教育調査官）

檀特 竜王氏（神戸市市長室国際部長）

取組⑩ 地域住民を対象とした啓発事業

（１）やさしい日本語フォーラム

広く市民にやさしい日本語に関する啓発を行うとともに、今後の取組の参考とするため、地域住民や外国雇用企業の従業員、教師などの外国人と日常的にコミュニケーションされている日本人と、外国人住民を対象としたフォーラムを開催

日時：２０２２年１２月１７日（土）１３：３０～１６：３０

場所：中央区文化センター１１０２会議室

参加：１５名、ほかオンライン視聴１７名

内容：・授業『やさしい日本語とは』（岩田先生（聖心女子大学））

・神戸市の取り組み紹介

・企業の取り組みを紹介（メルカリ・JICE 関西支所）

・グループワーク

（① やさしい日本語の実践、②やさしい日本語の取り組みアイデア）

（２）民生委員対象やさしい日本語研修

【日時】６月５日 １０：００～１２：００

【場所】北区有野台会館

【参加人数】30 人

(3) 児童館職員対象やさしい日本語研修

同じ内容で2回実施

- ◇ 講座名ポスターやチラシをやさしい日本語に翻訳しましょう！
- ◇ 日時：第1弾 12月6日、14:00～17:00
第2弾 12月13日、14:00～17:00
- ◇ 形態：対面（三宮にほんごプラザ）
- ◇ 講師：神戸大学名誉教授 水野マリ子氏
- ◇ 対象：神戸市内の児童館職員
- ◇ 参加費：無料
- ◇ 受講数：第1弾4名 第2弾3名
- ◇ 内容：①やさしい日本語の基礎知識
②やさしい日本語に翻訳しよう！

取組⑪ ICTを活用した教育・支援

(1)「会話のための初級日本語クラス」では、令和2年度から開催しているオンラインクラスを引き続き実施した。そのクラスでは、日本語学習に関するWebサイトなども活用し、学習者が家で日本語学習に取り組むためのアドバイスも行った。

取組⑫教材作成

(1) 学習評価のためのツール作成

【作成メンバー】

大河内瞳（大阪樟蔭女子大学講師）、岡本絹子（立命館大学非常勤講師）

尾形文（本事業総括コーディネーター兼地域日本語教育コーディネーター）

【作成のための会議】25回（計50時間）

昨年度は理論の整理などを行ったが、今年度は試作品を作成し、学習者や学習アドバイザー役の担当教師たちの使い勝手を観察するところまで進んだ。その結果を踏まえ、来年度の完成を目指す。

以下では、KICC初級クラスのうちの1クラス（以下、SCクラス）で、作成中の評価ツール（以下、神戸評価ツール）使って行ったアドバイジングセッションについて報告する。

[目的]

作成中の評価ツールはまずはKICC初級クラスで活用し、その後、市内の日本語教室にも広めていく予定であるが、学習者が評価ツールを継続して活用するためには学習アドバイザーかそれに代わるサポーターが必要である。KICC初級クラスのすべての学習者にアドバイジングができればいいが、1期で約180人の学習者に対応する学習アドバイザーを配置するのはコスト面や人材確保の点から現実的ではない。

そこで、KICC初級クラスを担当する日本語教師たちにアドバイザーの役割を担ってもらうことを考えた。しかし、学習アドバイジングは、学習者が学習を深く振り返るための対話であり、学習アドバイザーには、

アドバイジングの知識と実践に関する専門性を要求されることから、日本語教師だからといって学習アドバイジングができるわけではないと言われている。

上のことから、KICC 初級クラスの日本語教師たちが学習アドバイザーの役割を担うためには、どのような育成が必要かを検討する材料を収集するために、試行クラスにアドバイジングセッションを設けた。

[実践方法]

- ・ SC クラスの 2 時間の授業のうち、最初の 30 分をアドバイジングの時間とし、全 23 回にアドバイジングセッションを設けた。
- ・ 学習者数：12 名
- ・ 学習アドバイジングは、SC クラスを担当する 3 名の日本語教師が担当した。
- ・ 学習アドバイジングを担当する 3 名の教師はアドバイジングの経験がほとんどないため、評価ツール作成者のうちの 2 名が、3 名の教師たちのアドバイザーとなり、SC クラスでのアドバイジングに関する相談に乗った。
- ・ アドバイジングはクラス全体に対するグループアドバイジングとした。
- ・ 評価ツールの作成者が全 23 回のアドバイジングセッションのスケジュール（作成中の評価ツールに該当する）を考え、それを担当の教師たちが実行した。

[分析データ]

- ・ 教師たちへのインタビューデータ
 - 実践の前後に 1 回ずつ行った全 2 つのグループインタビューの音声データと文字化データ
 - 実践の前後に 1 回ずつ行った全 6 つの個別インタビューの音声データと文字化データ
- ・ 教師たちの報告メール
- ・ 評価ツール作成者が参与観察により作成したフィールドノート
- ・ アドバイジングセッションの前後に行った各教師との打ち合わせの音声データ

[アドバイジングセッションのスケジュール]

アドバイジングセッションは表 1 のスケジュールで実施した。3 週目の超短期目標の設定のとき、担当教師たちのアドバイジングがうまく機能していないと作成者たちは感じ、5 週目から新たな内容をするのではなく、引き続き超短期目標の設定を継続した。

表 1 アドバイジングセッションのスケジュール

日付	セッションの目標
第 1 週 11/14, 16, 18	【場作り】学習者が自分の日本語使用に自覚的になる／学習者が自分の経験を振り返る機会を持つ／互いの経験を語り合うことで、学習者間の関係を作る／他の学習者の経験が自分の学習に役に立つことに気づく
第 2 週 11/21, 25	【リソースの選択】学習で用いるリソースを選ぶことができる
第 3 週 11/28, 30, 12/2	【超短期の学習目標の設定】自分で学習目標を設定できるようになる／自分の学習を振り返って目標の修正ができる／他の学習者の学習目標から学習に対する異なる視点を得る
第 4 週	【超短期の学習目標の設定】自分で学習目標を設定できるようになる／自分の学習を

12/5, 7, 9	振り返って目標の修正ができる／他の学習者の学習目標から学習に対する異なる視点を得る
※第5週からは以下のように予定していたが、すべて第4週と同じ内容で行った。 第5週【学習スタイルの確認】 第6週【未来の自分の想像】 第7週【1年間の振り返り】 第8週【動機づけ】 第9週【1年間の日本語学習の振り返り】	
[実践の結果] 担当教師たちが下のような困難点を感じていたことが明らかになった。 ・初回到学習者にアドバイジングセッションについて説明をしたが、アドバイジングが重要だと思っている学習者は少なく、惰性で目標設定をしているような人や、毎回アドバイジングセッションが終わる頃に来る人もいた。 ・日本語の授業で発話を促すことに慣れている教師たちにとって、学習者が内省する時間を待つことができず、思考を促すまでに至らなかった。 ・担当教師たちは、アドバイジングセッションでは日本語でなくても母語でもいいと学習者に伝えたが、母語で書く学習者はいなかった。これについて担当教師たちは、学習者がSCクラスは日本語のクラスで共通語が日本語だから、日本語でないと伝わりにくいと感じたのではないかと、また、学習者は大人でプライドがあるため日本語で話したのではないかと、さらに教師が指名して学習者が順番に答えるという日本語学習の時間と同じ進め方をしたことが要因ではないかという。 ・教師たちは、学習アドバイジングは個別にするものであるため、グループの場合、一人の学習者に対して十分な時間を取ることができなかつたと振り返った。 ・グループアドバイジングの場合、クラスメートの発言を受け、自分も同じだと答える人がいたことを取り上げ、個別のアドバイジングだったら、そのような人ももう少し考えてくれたかもしれないと語った。 [考察と課題] 本事業で作成している評価ツールは、学習者オートノミー育成を助ける一つのツールである。しかし、メタ学習的な能力が育っていない学習者にとっては、評価ツールに記入する意味や継続する意義が理解できないと思われる。そのようなとき必要になるのが、学習アドバイジングである。どんなにツールがあっても、それを有効に使わないと学習効果が上がらない。 今回の実践では、日本語教師たちが学習アドバイザーをする際に現れる問題点が明らかになり、今後、学習アドバイザー役の日本語教師を育成するための課題が見えてきた。 まず、教師たちは学習アドバイジングと日本語学習の区別をしようとするが、日ごろの授業のイメージを払しょくできないままアドバイジングを行うので、学習者も日本語学習の時間との区別ができなくなる。教師は発話を促そうとし、学習者も日本語で答えることに必死になることで、お互いが学習アドバイジングの目的を忘れてしまう。 これについては、日本語学習においても、教師は学習者の発話を待つことが大切であるということを日頃の日本語学習で自覚している教師であれば、改善は容易だと考える。しかし、クラス内で沈黙の時間が発生しないように次から次に指名する教師であれば、そもそもの学習観や教授観などを転換しなければいけないかもしれないので、そのような教師をアドバイザーとして育成するのは容易ではない。 次に、担当教師たちは、アドバイジングは個別にするものだという意識が強く、今回のアドバイジングセ	

セッションでのアドバイジングがうまくいかなかったとき、どのようにすればグループでもアドバイジングができるのかという建設的な意見が出てこなかった。現在の実践がうまくいってないと思ったとき、何が問題なのかを発見し、解決策を練る能力が必要とされる。日頃の授業でも、教師主導で行わず、授業は即興であると認識している教師なら、批判的に自分の授業を振り返るはずである。学習アドバイザーにも、批判的能力の育成が必須である。

[来年度完成に向けて]

上では、学習アドバイザーとしての日本語教師の育成に関する問題点や課題を報告した。今回の SC クラスでの実践においては、学習者が神戸評価ツールを継続して活用するための課題も明らかになった。

・学習者に学習アドバイザーの意義や目的が伝わらないと、アドバイジングの時間が無駄になるため、口頭説明だけではなく、母語での説明文を準備する必要がある。また、アドバイジングの意義を学習者が理解するためには、アドバイザーによる働きかけだけではなく、評価ツール内に学習者の内省を促す仕掛けがあることが大切である。

・メタ学習能力がある程度高くなり、評価ツールの効果を学習者が認識できるようになるまでの期間、学習者が継続して神戸評価ツールに記入するためには、多言語化するにしても評価ツールに記載する問いかけなどを平易な表現にする必要がある。

以上のことを踏まえ、来年度、神戸評価ツールの完成を目指す。

取組⑬成果の普及

(1) 日本語ボランティアには各養成講座で、また KICC 登録講師たちにはクールごとに開催する講師ミーティングで本事業について周知した。

(2) 文化庁主催担当者情報交換会、日本語教育大会などで本事業について報告をした。

取組⑭ ウクライナ避難民の初級クラス用教材作成

【作成者】KICC 登録講師 (内田嘉美氏、峯岡知枝氏、若林佐恵里氏)

【名称】『神戸で暮らそう!』

【目的】特別な理由により来日し日本語を学ぶことになったウクライナ避難民たちが、家に閉じこもることなく、地域で自分一人でも行動できるようになることを目指す。そのためのコミュニケーションツールが日本語だけではないことも認識する。

【内容】

◇ A1 レベル 全 34 回分

第 0 回 学習の前に① 学習の前に②、第 1 回 外に出かけよう、第 2 回～第 8 回 買い物

第 10 回～第 14 回 健康、第 15 回～第 18 回 交通、第 19 回～第 26 回 外出、第 27 回～第 34 回 生活、

◇ A2-1 レベル 全 34 回分

第 0 回 学習の前に、第 1 回～第 4 回 贈り物・プレゼント、第 5 回～第 7 回 衣服・美容、

第 8 回～第 12 回 仕事、第 13 回～第 15 回 環境、第 16 回～第 22 回 趣味、第 23 回～第 27 回 健康、第 28 回～第 30 回 こんなときどうする①②③、第 31 回～32 回雑談①②、

第 33 回～第 34 回 おすすめ①②

・日本語を初めて学ぶ人で、幅広い属性を想定して作成した。 ・A1 の第 0 回には、翻訳ツールや通訳ツールを使ってコミュニケーションを取る方法を記載した。ウクライナクラスの学習者の属性や滞在期間などを想定できなかったため、どんな人にも対応できる教材を考えた。学習者がコミュニケーションにおいて日本語以外のツールも使えることを認識し、実際に活用してほしいと考えた。				
2. 市区町村の日本語教育の取組への支援				
(取組①) 市区町村を支援して実施する日本語教育				
(取組②) 取組 1 以外の日本語教育を行う団体を支援して実施する日本語教育				
3. 「日本語教育の推進に関する法律」第 11 条に基づく基本的な方針の作成				
(取組①) 基本的な方針を作成する上で必要となる委員会の設置				
【委員会の実施結果】 総合調整会議を以って検討委員会とした。				
実施回数	2 回			
実施スケジュール	1 回目：9 月 28 日 2 回目：3 月 28 日			
主な検討項目	第 1 回総合調整会議では、本年度までの作成経過と実地調査に代わる本事業取組の結果を報告し、神戸市の地域日本語教育が目指す姿を検討した。 第 2 回総合調整会議で、『地域日本語教育推進方針（案）』を提示し、委員から意見をいただいた。			
【設置する委員会は、条例に基づく委員会か】 【 】 条例に基づく 【 ○ 】 それ以外（※どちらか○で選択）				
	氏名	所属	職名	役割
1	岡田 浩一	神戸市海外ビジネスセンター	所長	市内の企業への外国人就労に関すること
2	板崎 聡	日本ベトナム友好協会 兵庫県連	常任理事	ベトナム人の就労状況の把握
3	安井 裕司	日本経済大学	教授	市内の大学の留学生の状況把握
4	内田 さつき	コミュニカ学院	校長	市内の日本語学校、及び日本語教育に関する情報
5	高西 宏和	中央区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
6	田中 謙次	長田区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
7	辻 敏彰	教育委員会学校教育課	指導主事	外国人児童及びその保護者の

				状況
8	松野 孝行	東灘日本語教室	共同代表	日本語教室の状況
9	村上 由紀	兵庫県国際交流協会多文化共生課	日本語教育指導員／総括コーディネーター	地域日本語教育に関する情報
10	篠原 典子	兵庫県国際交流協会多文化共生課	日本語教育指導員／総括コーディネーター	地域日本語教育に関する情報
11	奥 優伽子	”NPO 法人神戸定住外国人支援センター	日本語コーディネーター	日本語教室の状況
12	野上 恵美	ベトナム夢 KOBE	代表	市内ベトナム人の状況
13	林 文勇	(公財) 国際ロータリー第 2680 地区 米山奨学生学友会 (兵庫)	副会長	外国人の就労や企業の支援の状況
14	荒井 秀行	阪神金属協同組合	事務局長	市内の企業への外国人就労に関すること
15	永野 喜久	東灘区まちづくり課	課長	区内の外国人動向の把握、つなぐ仕組みの構築
	梅澤 章	神戸市国際課	課長	行政的見地からの意見
事務局	甲斐 隆弘	(公財) 神戸国際コミュニティセンター	部長	
	喜多村 直子	(公財) 神戸国際コミュニティセンター	課長	
	尾形 文	神戸松蔭女子学院大学	非常勤講師	
(取組②) 委員会における審議の基礎資料とするための調査実施				
過去 3 年間の本事業でのすべての取組成果の分析・整理を以って、調査とした。				
(取組③) 委員会における調査審議を踏まえた基本的な方針の作成				
日本語教育推進法を参酌し、神戸市の実情に応じた、『地域日本語教育推進方針 (案)』を作成した。作成に当たっては、有識者の意見を聞くとともに、過去 3 年間に実施した本事業の取り組みの結果から、神戸市の実情に応じた方針となるように努めた。 【スケジュール】 4 月～8 月：実施調査に代わるものとして、前年度までの本事業の取り組み結果をまとめた。 9 月：第 1 回基本方針作成委員会を開催 本年度までの作成経過と実地調査に代わる本事業取組の結果報告 10 月～2 月：委員会での検討事項を反映させて、基本方針草案を作成した。 3 月：第 2 回基本方針作成委員会を開催 『地域日本語教育推進方針 (案)』を提示し、内容について検討した。				

5 主要な取組の実施状況

令和4年4月	下旬 学習者・ボランティアへのアドバイジング開始（通年） KICC 初級クラス開始（通年） 読み書きクラス開始（通年）
5月	上旬 出前講座 実施 中旬 地域日本語教室コーディネーター研修 中旬 KICC ウクライナクラス教材作成開始 ウクライナ語で学ぶ KFC 日本語教室開始（～3月） 下旬 評価ツール作成再開
6月	上旬 民生委員対象やさしい日本語研修 上旬 出前講座 実施 上旬 落語で学ぶ日本語 下旬 KICC ウクライナ避難民のための初級クラス開始（～12月中旬） 企業内日本語教室広報活動
7月	下旬 夜間中学夏期日本語教室
8月	
9月	上旬 第1回ボランティア養成講座（～10月上旬） 中旬 企業内日本語教室広報活動 下旬 第1回総合調整会議
10月	上旬 企業内日本語教室広報活動 KICC 登録講師のための勉強会開始（～2月、月1回開催） 中旬 評価ツール試行活用 SC クラス開始 下旬 地域日本語教室連絡会議
11月	上旬 出前講座 実施 中旬 評価ツール試行 SC クラス開始（～2月）
12月	上旬 児童館職員対象やさしい日本語研修
令和5年1月	
2月	中旬 第2回ボランティア養成講座（～3月中旬）
3月	中旬 地域日本語教育シンポジウム@神戸 下旬 お抹茶と昔遊び 『地域日本語教育推進方針（案）』 第2回総合調整会議 事業終了、実績報告書の提出

6 評価と検証

1. 令和4年度の計画の評価と検証方法

【令和4年度の目標】（再掲）

「日本語が十分でないために地域社会への参加をためらっている外国人やその家族などの言語的マイノリティーが自分の声を持てるようにする」という本事業の目的を念頭に、3年目までに体制が整った取り組みを継続するとともに、4年目以降の2カ年は、市内外国人住民及び関係機関への本事業の周知浸透、および、継続的な日本語学習支援体制の強化、地域住民への啓発事業の充実を図る。

これに向けて令和4年度は、引き続き市内外国人雇用企業との関係づくりを進めるとともに、飲食店や宗教施設といった外国人住民にゆかりのある施設などとの関係づくりにも着手し、外国人住民を日本語学習支援につなげるためのネットワークの充実に努める。

また、本市における持続可能な地域日本語教育のあり方の検討を進め、基本方針として整理する。

さらに、自己主導型学習のための評価ツールの完成と、コーディネーターがその評価ツールを活用して学習アドバイジングを行う。まずは、初級日本語クラスの学習者のうち、次のレベルに上がれない学習者に対してアドバイジングを行い、学習のサポートをする。また、KICC登録講師やボランティアたちにも、自己主導型学習の理論を取り入れた研修などを行い、学習者の自律性を高める支援者の増加を目指す。

さらに、初級日本語クラスを終了した学習者を受け入れる体制を整備するために、自分のライフスタイルに合った日本語教室を選択するための多言語版の日本語教室一覧の整備や、KICCの地域日本語教育コーディネーターによる支援者へのアドバイジングを行う。また、日本語教室のコーディネーターやボランティアにも、学習者が自律的に学習できるシステムを支援するための方法を取り入れた養成講座や研修会も実施し、受け入れ側の質を向上する。

多文化共生社会実現に向けた受入側である地域住民に対する啓発事業としては、地域や企業、学校等外国人も関わりの深い機関を対象に、やさしい日本語を周知浸透させるための取り組みを実施する。

【令和4年度の目標達成に向けた指標（定量評価・定性評価を含む。）】

《定量評価の目標と検証方法》

令和4年度以降の本事業の日本語教育とその効果を高める取組や日本語教育人材育成に関する取組、また、自己主導型学習を支える体制に係る取組などについて、それぞれ以下の項目を総合的に評価することで効果の確認とした。いずれの項目も前年度の項目を超えることを目標に、それぞれの実施回数から算出した。

〈日本語教育〉

- ① 有資格の日本語教師による日本語教育：会話のための初級クラス、読み書きクラス（831人、1,933回）
- ② 夜間中学夏期日本語教育（15人、8回）
- ③ ウクライナ避難民のための初級クラス（9人、118回）
- ④ ウクライナ語で学ぶKFC日本語教室（27人、130回）

【指標1：定量評価目標】

- ・日本語教育の受講者数とその効果を高めるための取り組み合計数（上記、①～④の合計数）

[受講者数]

○目標値 829名（前年度実績551名）

○実績値 997名

[実施回数]

○目標値 申請書では設定せず（前年度実績1,957回）

○実績値 2,089 回

言語的マイノリティのうちでも特に、物理的理由や心理的理由により日本語学習を断念した人や、ライフスタイルと学習機会が合わず学習の場に参加できない人、学習機会にたどり着くための情報がない人を、本事業では潜在的学習者と呼び、それらの人々が社会や自分の家族に対して日本語で発言できるようになることを事業の目的の一つとしている。初級クラスの学習数が増加することで、これまで拾えなかった潜在的学習者にたどり着いていると想定できる。その割合がどの程度かを測る術はまだ見つかっていないが、今のところ、以下を判断の基準とすることができると考えている。①学習者の内、滞在年数が長い学習者数の増加、②学習者数の内、永住者、定住者、日本人の配偶者などの身分の学習者の増加。

今年度は、滞在歴が10年以上の人がわずかだが増加し、上の②に該当する人数が昨年比で1割増えた。本事業で開催する日本語クラスの認知度が上がり、それにより潜在的学習者たちにも情報が届き始めたと思われる。

また、今年度はウクライナ避難民のための日本語クラスを2か所で行った。参加人数はさほど多くはないが、定期的、集中的に教室を開講したことで、ウクライナ避難民たちの日本語能力の向上や神戸での生活の不安を少しでも軽減する助けになったと考えられる。

〈日本語教育人材の育成〉

- ⑤ ボランティア養成講座、研修会、出前講座（123 人）
- ⑥ 地域型メルマガの購読者数（117 人）
- ⑦ ボランティアやKICC 登録講師へのアドバイジング（7 人）
- ⑧ KICC 登録講師勉強会（62 人）
- ⑨ 地域日本語教育シンポジウム（117 人）
- ⑩ 大学日本語教員養成課程履修者への地域日本語研修（10 人）

【指標 2：定量評価目標】

- ・日本語教育人材の合計数（上記⑤～⑩の合計数）

○目標値 380 人（前年 160 人）

○実績値 426 人

〈地域日本語教育の効果を高める取組〉

- ⑪ 学習者へのアドバイジング（42 回）
- ⑫ コミュコミュひろば（21 回）
- ⑬ 教室立ち上げ支援（0 回）

【指標 3：定量評価目標】

- ・それぞれの対象となる数

上記⑪

○目標値：88 回（前年度実施なし）

○実績値 63 回

学習者が自律的に学習する能力とは、自分の学習目的を自覚し、自分で学習目標を設定し、自分の学習計画を立てて実行することである。それができるようになれば、その時々自分の学習計画に合った学習の機会を選択できるようになる。しかし、自律的な学習能力は育てないと育たないと言われているので、育成の1つとしてアドバイジングを行う。今年度、KICC 初級クラスのうち SC クラスで全 23 回のアドバイジングを行った。また、来館によるアドバイジングは 19 回実施した。

上記⑫

○目標値：56 人（前年度実施なし）

○実績値 115 人（21 回）

KICC 初級クラスの学習者たちは、教室以外では日本語をほとんど話さないという人が多いので、生の日本語を使う機会としてコミュコミュひろばを開催した。25 人のボランティアたちの協力のもと、毎回、ボランティアたちが企画、運営を担ってくれた。

上記⑬

○目標値：2 教室（前年度実施なし）

○実績値 0 教室

⑪で学習者の自律性を高めるとともに、ライフスタイルに合った学習機会を提供しないといけない。神戸市には現在 24 の日本語教室があるが、その多くが 3 つの区に集中している。他の 6 つの区にも外国人住民が増えていることから、学習場所の利便性を考えると、今後は教室空白地域に徐々に教室を増やしていかなければいけない。そこで、KICC のボランティアを中心に教室を立ち上げてもらおうと考えているが、人材の確保が難しく、未だ目標を達成していない。

〈日本語教育の普及〉

⑭ ごみぶんべつ〜！：地域住民の参加数（開催せず）

⑮ やさしい日本語フォーラム（32 人）

⑯ 民生委員対象やさしい日本語研修（30 人）

⑰ 児童館職員対象（7 人）

【指標 4：定量評価目標】

○目標値：20 人（前年度実施なし）

○実績値：69 人

⑭は⑫と同様に、ボランティアとともに活動することで教室外の生の日本語を体験する場となる。それにより、日本人とのやり取りに慣れ、地域社会に参加する際のハードルが下がればと考え企画したが、諸事情により開催に至らなかった。次年度の開催を予定している。

今年度新たな取り組みとして、⑮～⑰を実施した。この 3 つはいずれも日本人に対するやさしい日本語研修である。外国人との共生を目指すために、日本人に向けた外国人住民や日本語教育に関する啓発の重要性が高まっている。神戸市では、その足掛かりとして、まず、行政関連の方々に向けた研修に取り組んだ。

【指標 3：定性評価目標】

〈日本語教育〉

【指標 5：定性評価目標】

- 初級クラスにおいて、初級 1 から開始した学習者たちが日本語学習を継続し、初級 3 を終了する。

（定性評価）学習者が初級 1 から順調に初級 3 に進むことと、クール終了時ごとに実施するアンケートから得る学習者の満足度を指標とする。

（検証方法）教科書付帯の Can-do チェック、日本語教育における参照枠、本事業で作成する評価ツールなどを活用し、学習者の自己主導型学習を促進する取り組みを行うと共に、同じレベルに留まる学習者については、コーディネーターがアドバイジングを行い学習の改善のためのサポートをする。

【実施結果】

- 学習効果に対する評価は、教科書付帯の Can-do による学習者の自己評価を採用した。学習者による自己評価は、学習者のメタ学習能力が影響することからその妥当性が疑問視されることもあるが、学習者が Can-do による評価をくり返すことと、それに対する教師からの意識的な働きかけにより、学習者のメタ学習能力の育成にもつながることを期待して初年度より継続している。毎回の授業の最初と最後の評価では、☆3つのうち、初級 1 は 1.34 個、初級 2 は 0.85 個、初級 3 は 0.37 個増えている。また、初回と最終回の差分では、初級 1 は 1.30 個、初級 2 は 0.96 個、初級 3 は 0.69 個増えている。どのクラスも学習によりできることが増えたと評価しているが、日本語レベルが高くなるほど、☆の増え方が縮小する傾向にあることが分かった。

- 授業後のアンケート結果をもとに、学習者が満足だと感じた項目を以下に記載する。

- ・教科書（『まるごと』）・・・役立った 94%
- ・PPT／板書など・・・わかりやすかった 89%
- ・教師の授業態度（話し方、スピード）・・・よかった 86%
- ・会話練習の時間・・・時間があつた 79%
- ・教師からのフィードバック・・・あつた 76%

上のアンケート結果から、学習者は教材や教師の授業態度などに概ね満足していると考えられる。

〈評価ツール〉

【指標 6：定性評価目標】

- 自己主導型学習の実行のために評価ツールを完成させる。

【検証方法】

- KICC 初級日本語クラスと日本語教室で試行し、ボランティアなどからの意見を参考に改定をし、完成に至る。

- ボランティアのためのブラッシュアップ講座での活用も、ボランティアの使い勝手という点から試行の場と捉え、意見を聞き改訂の参考とする。

【実施結果】

- KICC 初級クラスのうち SC クラスで試行的に活用した。SC クラスを担当した 3 人の教師たちのアドバイジングや学習者の変化から、評価ツールの改善点が明らかになった。まず、日本語教師だからといって学

習アドバイジングがすぐにできるわけではないので、作成中の評価ツール自体にアドバイジング機能を加えるのが良いということがわかった。学習者の振り返りを促すための問いかけなどを多用することで、評価ツールがアドバイザーの役割を担い、教師の負担も軽減されると考えられる。

〈日本語教育人材の育成〉

【指標 7：定性評価目標】

○ ボランティアたちに有益な各種ボランティア養成講座を行う。

（定性評価）各養成講座の振り返りシートや終了時のアンケートから得られる受講者の満足度を指標とする。

（検証方法）各講座で毎回の各回ごとに振り返りシートを受講者に記入してもらう。また講座の終了日にはアンケートを実施する。

【実施結果】

○ 今年度の講座では、毎回の講義後、受講者にその日の振り返りを書いてもらい、講師がコメントを記入して返却した。それを繰り返すことで、最初は講座内容やそれに対する質問などを書いていた受講者が、ボランティアとしての将来の自分を想定し、足りていることと足りていないことを俯瞰したり、日々の活動を振り返り、なぜそのようにしたのかを内省する記述が増えたという変化がみられた。

○ 講座については、ほとんどの学習者が今後のボランティア活動に有効であると回答した。ただ、年間をとおしていくつかの講座を開催するが、リピーターが多く、学ぶ人は繰り返し学ぶが、そうでない人は講座に参加しないため、全体的なボランティアの質の向上には至っていないと考えられる。

2. その他、令和4年度事業の評価と検証方法

【取組③の4】企業への日本語教師紹介

（定量評価）

○ 今年度目標 5社×5人で25人（前年度実績：2社で10人）

（定性評価）企業と外国人従業員へのアンケートから得た結果をもとに満足度を量る。

（検証方法）企業の日本語教育担当者や従業員、および受講者である外国人従業員へのアンケートを実施する。

○ 今年度実績 0社

今年度予定していたアンケートを実施できなかった。しかし、上の取組③の4に記載したとおり企業への働きかけは継続している。企業の多くが、日本語教育推進法に外国人従業員やその家族への日本語教育を担う企業の責務が謳われていることを認知していないことがわかった。

【取組③の3 市内日本語教室への補助】

【指標 5：定量評価目標】

○ 目標値 7教室（前年度5教室）

○ 実績値 6教室が申請し5教室に交付した。

7 検証を踏まえた課題と今後の展望

1. 検証を踏まえた課題と今後の展望
(1) 検証を踏まえた課題 【潜在的学習者の掘り起こし】 本事業の目的の一つである潜在的学習者の掘り起こしについては、初級クラスの学習者数の増加と、その中でも、身分による滞在者が少しずつ増えていることから、効果が発揮できていると考えられる。しかし、今年度、市の生活支援課の方が付き添って来た人のように、8年ほど日本語学習の場を探していたというケースもあることから、今後は図1のネットワークの要素をさらに増やすことが課題である。 【日本語教育人材の育成】 本事業では、2年目から学習者が急増したことで、登録講師を増やした。その結果、現在39人の日本語教師がKICCに登録している。しかし、そのほとんどが生活者への授業経験がない。日本語学校の留学生を対象に授業をしてきた教師たちの教育パラダイムは旧態依然のものであり、CEFRの理念に移行しようとしている地域日本語教育に追いついていない。そこで、令和2年より、教師たちに参考文献を提示したり、クールごとに実施する講師ミーティングで話をしたりしてきたが、これまで培ってきたビリーフは容易には変わらない。教師たちが意志的に自分の成長に取り組むのを促すことが課題である。 (2) 今後の展望 令和4年に24人だった初級クラスの学習者が4年目の今年度は997人に増加した。これは、図1の要素が増えたことにもよるが、口コミで広がっていることが学習者からのアンケート結果からわかった。今後も、初級クラスが存在が多く在住外国人たちに届くよう継続していきたいと考えている。 また、本事業の基盤である自律学習のための取組については、評価ツールの完成を急ぎ、それを学習者が使うためにアドバイザーの育成もしていかなければいけない。 そして、今後、神戸市の実情に応じた『地域日本語教育推進方針』が作成されれば、それを抛り所に、さらに地域日本語教育の体制整備を推進していく。
2. その他、課題と困難な状況への対応方法等
(1) 課題と困難な状況への対応方法 【日本語教育人材の育成】 ○ KICC 初級クラスを担当する講師の質の向上 今年度から、月1回、勉強会を開催することにした。講師たちが選んだ文献を中心に、質問をし合ったり、授業の悩みなどを話し合ったりしている。これにより、少しずつだが変化がみられる教師たちもいるので、今後も継続していく。 【潜在的学習者の掘り起こし】 図1の要素を増やすために、今年度新たに取組④に記載した「各区生活支援課等保護係長会議」でKICC初級クラスの紹介をさせていただいた。 課題3 自律学習の育成に向けた取組 自律学習の育成には、好きなときに学習ができるようさまざまな学習リソースがあるセルフアクセスセンターと、学習をサポートする学習アドバイザーと、学習を可視化する評価ツールが必要だといわれている。

本事業では、生涯をととして日本語を学ぶであろう生活者の自律学習の育成に取り組んでいる。

今のところ、三宮にほんごプラザがセルフアクセスセンターの役割の一部を担っている。また、令和3年度より評価ツールを作成中であり、今年度は、SCクラスに試行的にアドバイジングセッションを設け、3人の登録講師が学習アドバイジングを行った。これにより、日本語教師がアドバイザーの役割を担う際の困難な点が明らかになり、学習アドバイザーの育成が必要なのことがわかった。

今後は、現在継続中の講師の勉強会でも学習アドバイジングを取り入れるなどして、アドバイザーの育成を行っていく。

【参考写真一覧】

取組番号	写真名
取組⑥活動1	KICC 初級クラス 三宮にほんごプラザ
 子ども同伴が可能な KICC 初級クラスには、小学校の夏休みには、子どもを連れてくる人もいます。	
取組⑤-1-(2)	日本語ボランティアのためのブラッシュアップ講座 「主導型学習ってなに？」



協力者の学習者に対して、受講者のボランティアたちが学習アドバイジングの練習をしている様子

取組⑨-
(3)

地域日本語教育シンポジウム@神戸
「共生に向けた地域社会の変容
～ゲスト文化とホスト文化から第3の文化の構築のために～」



取組⑨-
(2)

お抹茶と昔遊び



会議室に設えた本格的なお茶室で、茶道を体験する人たち

【参考資料一覧】

取組番号	資料名	NEWS 掲載
取組⑭	ウクライナ避難民のための初級クラス用教材 『神戸で暮らそう！』	○